

政務活動報告書

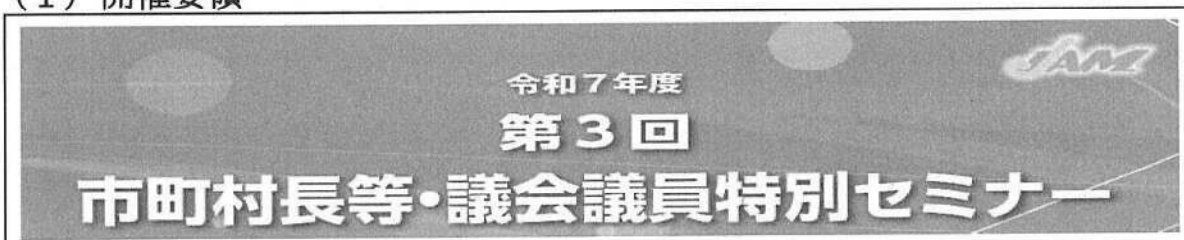
令和8年1月21日

〔会派名：喜働 〕

代表者氏名	川合 滋	記録者氏名	幸松 孝太郎
研修者氏名	幸松 孝太郎		
研 修 日	令和8年1月19日（月）～1月20日（火）		
研 修 先	滋賀県大津市唐崎町 全国市町村国際文化研修所（オンライン受講）		
目 的	今回の研修では、日々めまぐるしく変わりゆく国内外の情勢の中で、各分野で活躍の先生方からの講演を聞き、様々な行政課題を学び、施策を提案・実施していくことが求められています。そして、改めて現代社会を捉え直すとともに、今後のわがまちの未来や地方行政に求められる役割について多角的に考えることが目的である。		

研修概要

（1）開催要領



（2）講義の所感（今講演資料は、複製や一般公開は禁じられているため、添付なし。）

1. 講義：ウェルビーイングと人口減少社会のデザイン

講師：京都大学 名誉教授 広井 良典 氏

①講義の要旨

まず最初に、人口減少社会のデザインについての講義では、人口減少が進む日本では、これまでの成長モデルから転換し、成熟社会としての新しい価値観が求められている。広井教授のAIシミュレーションでは、都市集中よりも地方分散型の社会が、人口・財政・幸福度の面で最も持続可能であることが示された。若い世代ほど地域志向が強まり、コミュニティや自然、文化といったローカルな資源が豊かさの中心になる。GDPでは測れない幸福を重視し、健康・福祉・環境・農業・文化など地域で完結する領域を強化することが重要である。

特に若者や将来世代への投資が、人口減少の流れを変え、地域の未来を支える基盤となる。全体として、成長至上主義から「持続性・幸福・地域」を軸にした社会デザインへの転換が必要だと説いている。

次に、ウェルビーイングの講義では、広井教授は、ウェルビーイングを「心の満足」だけでなく、人とのつながりや自然と共に生きる持続可能な暮らしまで含む広い概念として捉えている。資本主義が重視してきた「個人の所有・競争」から、「分かち合い・公共性」を大切にする価値観へ移ることが重要だと説く。その象徴として、日本の「鎮守の森」を例に、自然とコミュニティが共にある環境が安心感や幸福感を生むと説明する。



また、効率優先の直線的な時間ではなく、自然のリズムに寄り添う“ゆとりある時間”を取り戻すことも必要だと指摘する。全体として、拡大や成長を追い続ける発想から離れ、地域の豊かさを再発見することこそが、これからの幸福の鍵であるというメッセージが一貫している。

②所感

「人口減少社会のデザイン」と「ウェルビーイング」は、別々のテーマではなく、実は深く結びついた一つの課題だと感じた。人口減少を“右肩下がり問題”として捉え続ける限り、自治体は人口争奪戦に追われ、市民は将来不安に包まれる。しかし、広井教授が示すように、これを“成熟への移行”と捉え直すと、人口が減るからこそ可能になる、一人ひとりに丁寧に向き合う暮らしや、自然・時間のゆとりを大切にする「質の高い生活」が見えてくる。

真のウェルビーイングとは、単なる個人のポジティブ感情ではなく、「この地域で、他者や自然とつながりながら安心して暮らせる」という社会的な信頼感に支えられている。これからの自治体経営に求められるのは、道路や建物といった“見えるインフラ”だけではなく、人と人、人と自然を結びつける“見えないつながり（社会資本）”をどう育て、デザインしていくかである。

2. 講義：こども食堂からつながる地域・社会

講師：認定 NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ 公共政策アドバイザー
湯浅 誠 氏

①講義の要旨

こども食堂は、貧困対策にとどまらず、誰でも参加できる“地域の居場所”として多世代交流を生み出す取り組みである。人口減少でつながりが失われる中、属性や分野を超えて人を結びつけるハブとして機能する。深刻化する前の“黄信号”段階で支える予防効果があり、高齢者の健康づくりや孤食対策、虐待予防にも寄与する。

国の政策も「交流×支援」のハイブリッドを重視しており、こども食堂はその方向性と一致する。多様性を受け止め、災害時にも力を発揮する“令和型コミュニティ”として、地域の縁を再構築する基盤となる。

②所感

こども食堂は、困っている子どものためだけでなく、地域の誰もが安心して集まれる“現代の公園”だと実感することができた。人口減少が進む名張市では、人が減る以上に「つながり」が失われて来ている。そのつながりを取り戻す拠点として、こども食堂は大きな可能性を持っている。子ども、高齢者、子育て世代、外国人、一人暮らしの若者まで、誰もが線を引かれずに参加できる場所だからこそ、自然に「気かけ合う関係」が生まれる。困りごとに気づき、支え合える地域は、まさに「誰ひとり取り残さないまち」の姿でもある。行政がすべてを担うのではなく、地域の力を信じ、環境を整えることが重要である。こども食堂をはじめとする地域の居場所を、市民とともに育てていくことこそ、名張市の未来をつくる道だと確信することができた。

3. 講義：地方の可能性を世界経済とつなぐ

講師：株式会社 SHONAI 代表取締役 山中 大介 氏

①講義の要旨

地方は「希望のない場所」ではなく、自ら行動する当事者が希望を生み出す舞台であるという強い理念が示された。SHONAI は、農業・観光・不動産を通じて“外貨を稼ぐ”仕組みをつくり、その利益を子どもへの“教育投資”として還元する循環モデルを実践している。地域企業には、人的・金融・社会の3つの資本を提供し、100億円企業を1000社育てるという大胆なビジョンを掲げる。

さらに、山形県庄内でのホテル開発のように、“何もない”と思われていた庄内で、年間6万人を集めるホテルを創出地域資源を“編集”し直すことで新たな価値を創出し、世界市場とつなげている。地方の価値は眠っているだけであり、戦略と挑戦によって大きく開花することを示した講演だった。

②所感

山中社長のお話から、地方にはまだ大きな可能性が眠っていることを改めて実感しました。その可能性は、誰かが与えてくれるものではなく、私たち自身が当事者として動くことで初めて形になるという言葉が強く心に残りました。

名張市にも、農業、観光、食、文化、人材といった多様な資源がある。それらを丁寧に編集し、磨き上げ、世界とつなげていくことで、名張市はもっと輝けるはずである。そして、そこで得た成果を子どもたちに投資し、「名張で育ってよかった」と思える未来をつくることが重要である。市民・企業・行政が同じ方向を向き、挑戦する人を応援するまちへ……。名張市も必ず地方の希望になれると確信することができた。

4. 講義：人がつどい未来に躍動する世界都市・高松を目指して

講師：香川県 高松市長 大西 秀人 氏

①講義の要旨

大西市長の高松市の講演は、人口減少を前提に都市を再設計し、「コンパクト・プラス・ネットワーク」で歩いて暮らせる持続可能なまちをつくる戦略が中心に据えられていた。丸亀町商店街の再開発に象徴されるように、市民主体の合意形成とルールづくりが成功の鍵となっている。

さらに、サンポート高松を核に、ホテル、アリーナ、大学、新駅などを集積させ、瀬戸内の玄関口として世界都市化を進めている点が特徴的だった。芸術祭や音楽イベントなど、文化を成長エンジンにする「創造都市」戦略も強力で、男木島の移住増加に見られるように文化が地域を変える実例が示された。子育て支援では医療費助成や給食費無償化、芸術士派遣など全国トップクラスの施策を展開し、子どもの育ちをまち全体で支える姿勢が徹底されている。さらに、小学校区単位のコミュニティ協議会が補助金を自ら配分し、地域包括ケアと連動するなど、市民協働による「ほっとかんまち高松」を実現している点も大きな特徴であった。

②所感

高松市は、人口減少・超高齢化・財政制約という全国共通の課題に真正面から向き合っていることがよく理解できた。その中で大西市長が示したのは、「縮むからこそ、都市を再編集する」という前向きな発想でした。都市の再生、文化の力、子育て支援、そして市民協働を一体で進めること

で、まちの未来を自らの手でつくり出している。課題を嘆くのではなく、限られた資源を活かし直す姿勢が強く印象に残りました。まさに、名張市も同じ課題を抱えている。だからこそ、市民とともに未来をつくる視点が欠かせません。中心市街地の再生、公共交通の再編、子どもの育ちを支える環境づくり、地域コミュニティの再構築、名張ならではの文化と自然の活用。これらを市民と一緒に進めることで、名張市もまた、市民とともに歩めば、さらに輝く町へと進むことができる。高松市の挑戦は、その一步を踏み出す勇気を与えてくれました。

5. 総括

4つの講義は、名張市にとって次の方向性を示している。

- ・地域のつながりを再生する拠点づくり（こども食堂・居場所）
- ・地域資源を磨き、外に開く戦略（農業・観光・文化）
- ・子どもへの投資を“まちの未来戦略”として位置づける
- ・市民・企業・行政が同じ方向を向く協働のまちづくり
- ・人口減少を前提に、都市構造を再編集する視点

名張市がこれらを組み合わせれば、「小さくても強く、誰も取り残さない、挑戦するまち」へと確実に進んでいけると感じられる内容であった。

以上